

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ドラッグ・ラグ解消へ、109 品目開発要請」
- 2) 「もやし人気、だけど・・・」
- 3) 「青紫色カーネーション人気」

---

1) 「ドラッグ・ラグ解消へ、109 品目開発要請」

海外で承認されている薬が日本で使えない「ドラッグ・ラグ」の解消に向け、厚生労働省は5月中旬にも、未承認薬など109品目について、国内販売に向けた準備に入るよう製薬会社に要請する。検討会の結果を受けた措置で、厚労省が一度にこれほど多くの医薬品について承認を促すのは初めてだ。要望のあった374品目を検討し、今回109品目を「医療上の必要性が高い」とした。別の病気で承認されているのに病気が異なると医療保険が適用されない「適応外薬」も含む。

日本製薬工業協会によると、外国で新薬が発売されてから日本で発売されるまでに平均で4.7年かかる。米国（1.2年）の約4倍の期間。

厚労省の計画では、要請を受けた会社は1年以内に治験に着手するか、海外などで使用実績がある薬については治験を行わず、半年以内にデータを検討会に提出するよう求めている。

一方、国内では一般薬の流通において、2009年6月の改正薬事法の全面施行によってスーパーやホームセンターなどがOTC薬の販売に進出するなど、大きな変化がでてきている。その中で、生半可な知識で扱える商品ではないので、登録販売士という資格保有者が配置されているが、まだまだ経験値の差が出るなど問題は山積みだ。

医療の現場では新薬であろうと知識や経験のあるスペシャリストがいるが、資格があるだけで販売されている一般薬にドラッグストアチェーンの多くは情報提供や相談機能の強化、調剤部門の強化を後押ししているのが現状だ。目薬や風邪薬ひとつにしても使用方法を誤れば大きな事故を招きかねない。薬の消費者まで安心して届くような流通システムが必要とされるのではないか。

---

2) 「もやし人気、だけど・・・」

天候不順による野菜の値上がりで、安価で価格変動の少ないもやしの売れ行きが好調だが、もやし業者は手放しでは喜べない状況に陥っている。生産能力に限界がある上、現在主流のもやしの種となる「緑豆」はほぼ輸入に頼っており、主力の中国産が高騰しているためだ。

もやし業者の全国団体である「全日本豆萌工業組合連合会」は「売れるのはありがたいが、このままでは経営が圧迫され、安定供給に支障をきたす可能性がある」と悲鳴を上げている。

1袋30-50円と安価なもやしは、野菜が高騰した4月下旬以降、消費者の味方として引っ張りだこだ。スーパーでは300袋が完売した日もあるといい、売り場担当者は「はずせない商品」と話す。

一方で生産者の表情は明るくない。最大手の成田食品（福島県相馬市）によると、近畿向けなどのもやしを生産する岐阜工場（岐阜県大垣市）の4月下旬の出荷は通常の3-4割増と好調だったが、「生産能力には限界がある」と困惑する。また、あるもやし業者は「売れても、実はほとんど利益にならない」と漏らす。

緑豆は9割が中国からの輸入で、09年秋に収穫された緑豆の取引価格が08年産より約6-7割高と高騰した。主産地の吉林省や内蒙古自治区などが干ばつに見舞われたことや、中国国内での緑豆を使った加工食品や漢方薬としての需要の高まりが原因とされ、業者は緑豆を確保するのに苦労している。

全日本豆萌工業組合連合会によると、仮に10年度産が豊作になっても、中国を中心に需要が旺盛で、価格の大幅な下落は期待できないという。もやしは特売で1袋10-20円になることもある。デフレの現状では、コスト上昇分の価格転嫁は困難で、同連合会は「このままでは生産者がもたない」と危機感をあらわにしている。

値段も安く、料理に加えればかさが増え、歯触りがよくて食べ応えのあるもやし。この「節約の見方」に目を付け、食品メーカーや出版社はもやし周辺ビジネスを盛り上げているが、こうした裏側の事情があるということもたまには考えてみることも必要だと思った。日本食ブームが中国や台湾でこのまま加熱すると、輸入に頼る日本はますますピンチになるのではないかと。いつでも安い値段で手に入ると思っていたもやしも1袋100円なんて時代もひょっとしたらくるかもしれない。もやしに限らず他の物についても同じことが言えそうだ。

---

### 3) 「青紫色カーネーション人気」

母の日の9日、東京・銀座の「日比谷花壇銀座松屋店」は、カーネーションを買い求める人々にぎわい、青紫色の「ムーンダスト」に注目が集まっていた。

飲料メーカーが1995年に豪州の企業と共同開発し、4・5年前から市場に広く出回るようになった。「固定ファンが多く、最近の開発直後に続き、再び注目されている」と工藤悦弘店長。かすみ草や淡いピンクのバラを添えるのが人気だという。

また、カーネーションだけでなくあじさいなど季節の花を贈るのも人気だそうだ。

母の日といえば真っ赤なカーネーションが定番のようなイメージを持っていたが、そもそもは「白いカーネーション」を贈ったことが母の日の始まりだったことを考えると不思議ではない。お母さん方が喜ぶのであれば何を贈ってもおかしくないが、何でもかんでも〇〇の日にこじつけた「固定観念を振り払う商法」はこの先どんどん増えるだろう。贈り贈られた人が喜び、商売繁盛するのは良いことだが、たまにはその記念日の意味を思い出してみることも必要かもしれない。